

## 宮城でボランティア 三条の小学校教諭

田村さん夫妻とオンラインでつながった昨年の授業。霜崎大知教諭が命の大切さを伝えた=2022年3月、三条市の月岡小学校(同校提供)



2011年の東日本大震災の被災地でボランティアを続けてきた三条市月岡小学校の霜崎大知教諭(28)が、命の尊さを知つてほしいと防災教育に取り組んでいる。伝えるのは津波で長男を亡くした宮城県の夫妻の思い。3月で震災発生から12年。夫妻は「息子が命の大切さに気付かせてくれた」と語り、教諭は寄り添う。

(報道部・小林千剛)

# 津波で長男亡くした夫妻と交流 遠隔授業で思いを共有

日本震災  
12年

霜崎教諭は震災時、埼玉県の高校1年生だった。翌年春休み、単身深夜発のボランティアバスに乗り込み、被災地に向かった。東京の大学、その後上越教育大の大学院に進んだ後も年3、4回、宮城県石巻市や女川町にボランティアで通った。

その中で、16年に出会ったのが女川町で震災の語り部をしていた田村孝行さん(62)、弘美さん(60)夫妻だ。長男の健太さん(25)を津波に奪われていた。

健太さんは勤務先の銀行の支店内にいた。女川湾から約100㍍。支店長の指示で屋上に避難したが、その高さを大きく上回る津波に他の行員らとのみ込まれた。半年後、湾内で見つかった。ワイシャツにネクタ

前があった。津波の水位が非常に高くなる地形の女川では、山に逃げることが鉄則とされていた。目の前に高台もあつた。「指示に疑問を持ちながらも、日頃から慕う支店長の指示に従わざるを得なかつたのだろう」と孝行さんは考える。

霜崎教諭は田村夫妻の話を聞き、教え子たちに「自分の命を自分で守れる大人

への思いを伝える予定だ。孝行さんは「いつか天国で健太に会ったとき『あなた



月岡小の児童から送られた授業の感想文を読む田村孝行さん、弘美さん夫妻=6日、宮城県

田村夫妻のもとには「災害にしっかりと向き合いたい」といった児童の感想文が届いた。今年も3月1日が届いた。今年も3月1日

へのオンライン授業で、息子の命を守るのかについて教えたい」と語り、弘美さんも「命さえあればいい。それが一番大切な命だ」と繰り返す。

夫妻はこれからも霜崎教諭のような人たちと共に、震災の教訓を伝え続けたいと考えている。子どもたちにまた“種”がいつか芽吹き、息子と同じ悲劇が繰り返されないことを願つている。

田村夫妻のものには「災害にしっかりと向き合いたい」といった児童の感想文

が届いた。今年も3月1日

が届いた。今年も3月1日